家族の気持ち　子どもと家族の笑顔は社会の希望～育ちの環境としての親

R5 年 4 月 10 日　那須　康子先生

2016 年　しょうがい児が子どもになった年

家族になろう　チームになろう。発達を見極めて支援する。障がいの有無にとらわれない。私たちは仲間。地域で暮らすにはどんな暮らしをしたいのか、他者が決めるのではなく、それぞれの人生観に基づく生き方、子どもの思い家族がどう生きたいのかを支援していく。

親御さんの背景に思いをはせる。愛されて育ってきたかなあ、人格形成は順調かなあ、疾病や障がい、障壁を抱えて困っていないかなあ。思いをはせるが結論は急がない。

乳幼児期は大人が粘り強く待つこと。子どもは信じて見守られていることを認識してのびのび育つ。待てる親、待てる支援者になる。子どもの発するサインを受け止めて、待てる療育で本人の育ちを待つ。

仁志田先生　優しさを科学するあたたかい心。赤ちゃんは痛みを脳で感じる。メッセージをまなざしで伝える。まなざしは輝きである。

子どもが成長し安定するには、親が落ち着き、子どもの強みを見る、把握する。子どもを尊敬できる。人が呼吸するように対話をする。堂々巡りを一緒に堂々巡りし、一緒に聞く。今すぐ救わないといけないと思わない。家族力を出せるよう支援する。待てる支援者になる。